

1 実践テーマ

コミュニケーション教育 ・ シティズンシップ教育

「演劇を通して地域の課題を知る学習」産業社会と人間における演劇の授業
対話を通して違いを乗り越える力を育てる授業について

2 実践のねらい（実践を通してどのような効果の発生を期待するのか）

「演劇を通して地域の課題を知る」授業は、産業社会と人間における本校の3つの柱
「自分を知る・地域を知る・世界を知る」の中で、「地域を知る」学習の一環として行われている。
演劇を通して学んだ様々な地域課題を基に、2・3年次の未来創造探究へと繋げていく。

《なぜ演劇なのか？》

コミュニケーション能力 = 合意形成能力 その合意形成のトレーニングができるのが演劇。
他者の視点で物事を捉えることで、地域の課題を他人事から自分事へ引き寄せることができる。
イメージの共有がしにくいもの = 人の心 を共有しやすいのが演劇。

「ベルギー」と言えば何を思い浮かべますか？大体、チョコレート、ワッフル等でしょうか。
これをベルギーの人に聞くと、大抵「フライドポテト」と答えるんです。不思議ですね。
国内と国外の人が持つ、その国のイメージはこれほどまでに違うんです。

じゃあ、みなさんは、「ふくしま」と言えば何を思い浮かべますか？
例えば山形なら、県内の人でも県外の人もみんな「さくらんぼ」と答えるでしょう。
福島はどうでしょう。

（生徒達から「もも」、「富士山」、「相撲」、「白虎隊」、「地震」、「原発」などの意見が出ました）

今、世界から見たら今の日本のイメージは「原発」が強いですね。
震災後、これだけ県内と県外が持つふくしまのイメージは異なってしまった。
これは、我々大人の責任であって、君たちの責任では全くないのだけど
申し訳ないけど、このことを背負って君たちはこれからの社会を生きていかなければいけない。
なぜなら、君たちがふくしまで生まれたということは変えられないからです。

この先、みなさんは「ふくしま」について必ず聞かれるでしょう。
その中には、ふくしまについて全く違ったイメージを持った人もいると思います。
同じ福島県内に住む君たちでさえ、その経験は様々ですよね。
そんな時に、君たちには「ふくしま」についてきちんと伝えることができるようにならなければいけない。
でもね、いくら論理的に伝えようとしても相手に伝わるかどうか難しい。言葉だけではイメージの共有は難しいんです。
風評被害と闘うためには、伝え方を工夫しなければいけない。その伝え方の一つとして「演劇」があるんです。

「演劇」は、言葉で論理的に説明するよりもイメージの共有がしやすい。
特に、一番イメージの共有をしにくいのは「心」です。これを共有しやすくするのに「演劇」は有効です。

平田オリザさん（2019年10月9日の演劇ワークショップより）

3 実践の概要

《主に演劇に関わるプログラムについては以下の通り》

- 7月 3・10日（水）双葉郡バスツアー（双葉郡の人・地域を知る
- 9月18日（水）地元のヒーローインタビュー 記事作成
- 10月 2日（水）先輩の演劇を鑑賞・台本分析

PDCA サイクルから AAR サイクルへ

Anticipation

Action

Reflection

とにかく毎日チームで対話劇と向き合
い、毎日の振り返りを大事にした。

- ・自分の力で世の中を変えられると考えている若者が、諸外国に比べて少ない。
- ・理念や概念の理解、情報活用能力が十分身につけていない。

演劇の授業を通して実際に地域に出て、多様な大人と出会い、対話劇を創ることを通して地域の問題を他人事から自分事に引き寄せることができた。しかし、震災に限らず、生徒自身の知識が乏しく、さらに情報活用能力が十分身につけていない。そのためにCritical Thinkingが苦手な生徒が多い。一つの出来事について複数の立場の方から話を聞くなど、今後産社の授業の進め方については工夫が必要である。震災から間もなく9年が経とうとしており、今年の1年生は震災当時小学1年生である。震災の記憶が薄れてきているように感じる。これまでのプログラムの他に、震災のことや原発事故のことについて、正しい知識をインプットする時間が必要になってきているのかもしれない。